

1 1	海部	飛島学園	イトウ ユウキ 名前 伊 藤 友 喜
分科会番号	2 0	分科会名	総合学習

研究題目 自己の力を信じ、主体的に未来を切り拓く飛島っ子の育成
 ー思考力・共創力・遂行力を育む「飛島未来探究科」の実践を通してー

研究要項

1 研究のねらい

本校では、生徒が将来社会を自らの力でたくましく生き抜く資質・能力を培うことをねらい、「自己の力を信じ、主体的に未来を切り拓く飛島っ子の育成」をテーマに研究を進めてきた。そのような背景の下、義務教育学校としての特質をさらに生かすために令和5年度に「飛島未来探究科」（「通称：TOBI 探」と呼ばれる独自教科）を立ち上げた。生活科と総合的な学習の時間を軸に、探究的な学びを系統的に展開することをねらいとした本科は、本年度で立ち上げから4年目を迎える。

本格的な実践研究の初年度であった一昨年度は、飛島未来探究科を実践する上で、全学年共通した学び方と9年間で学ぶ内容を整理した。それを踏まえ、昨年度は問いや課題の設定場面を大切に、生徒が探究の道筋を想起しながら単元の学びを進められるように工夫した。また、実践を複数年重ねてきたことで、生徒・教師の双方に TOBI 探の学習展開や内容が浸透してきた。しかし、生徒自身が学びの連続性を意識することや、対象や方法を考えて探究内容を発信することについてはまだまだ検討の余地があり、課題の一つであると言える。

そこで、本年度は、「連続性」（学びのつながり）を意識した学習場面を単元内に位置付けたいと考えた。前後の学年でどのようなことを学んだのか（学園としての学びの連続性）、これまでの学びで生かせそうな要素はないか（自身の学びの連続性）、学習内容における過去・現在・未来の実態や予測はどうであるか（時間軸での学びの連続性）等のつながりを、より意識して学びを展開することを目指す。教師が「連続性」に関する問いかけをしたり、生徒が「連続性」を意識した調べ学習や考えの構築を行ったりすることで、生徒・教師の双方が学びのつながりを意識できるようにする。そのような学びを展開しながら、思考力や共創力、遂行力を高めることで、本校の目指す研究題目に迫っていきたいと考える。

2 研究仮説と方法

(1) 研究仮説

研究を進めるにあたり、目指す生徒像を次のように設定した。

よりよい未来に向けて、多様な他者とともに、
 自他の思いや考えを実現させようと努力する子

さらに、どのような力を伸ばすとよいか、教師と生徒が共に理解しながら取組を進めるために、「飛島未来探究科」で育む力として次の3つを挙げ、定義付けを行った。

【「思考力」(考える力)】

疑問や課題を見いだしたり、最適解や納得解を自分なりに考えたりしていく

【「共創力」(共に創る力)】

さまざまな他者と関わりながら、よりよいものや新たな価値を生み出していく

【「遂行力」(やり遂げる力)】

自他の思いを具現化しようと挑戦し、課題や困難に打ち克ちながら前進していく

このような生徒像の実現に向け、研究仮説を設定した。

実生活や実社会における課題を発見し、さまざまな他者と関わって試行錯誤したり、学びのつながりを意識しながら課題解決に向けて学習を進めたりすることで、多様な他者とともに、自他の思いや考えを実現させようと努める意識が育まれるであろう。

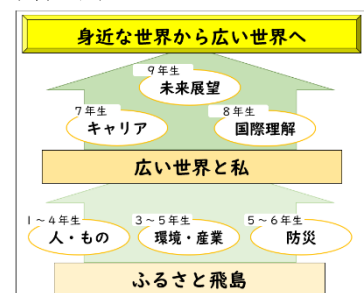
(2) 研究の方法

【仮説に対する主要な手立て】(9年間を見据えた共通基盤)

仮説に対する主要な手立てとして、飛島未来探究科の学習内容(学習の柱)と学習活動(学び方)を設定し、飛島未来探究科の学習に取り組むための共通基盤をつくった。この主要な手立てを踏まえ、各学年の取組や実践を推進するために、さらに具体的な手立てを講ずることとした。

★『身近な世界から広い世界へ』(飛島未来探究科の学習内容・学習の柱)

主に、前期課程(1～6年生)においては「ふるさと飛島」をテーマ(学習の柱)に、多様な視点から飛島村に関する学習を進める。後期課程(7～9年生)においては「広い世界と私」をテーマ(学習の柱)に、自分の未来や社会に対して視野を広げる学習を進める。9年間でこれらの学びを積み上げることで、飛島村への郷土愛を育むとともに、自分や地域・社会の未来に対する意識や社会の一員としての自覚を高めていく。



★『探究を「発」展させる飛島モデル』(飛島未来探究科の学習活動・学び方)

飛島未来探究科では、どの学年も同じ学び方で学習を進める。生徒が同じ学び方を繰り返し経験し、探究的な学び方を身に付けることができるように、飛島モデルに沿って学習を展開する(このサイクルを一年で1サイクルまわす。可能な場合は複数単元で複数回まわしてもよいこととする)。

段階	発見	発掘	発想	発信
学習活動	・ 見つける ・ 見通す	・ 調べる ・ 共有する	・ 考える ・ 共有する ・ 再考・実践する	・ 伝える ・ 広める

振 り 返 り

【仮説に対する具体的な手立て】(各学年や各実践レベルにおける手立て)

飛島未来探究科で育む3つの力や学習モデルの各段階との主な対応を検討しながら、各実践や単元を進める際の具体的な手立てを次表のように整理した。

		発見	発掘	発想	発信
(ア)思考力	(教師の問いかけ・調べや意見構築) 連続性を意識した学習場面の設定	・企画書の活用 ・疑問を出し合う場	・意見構築の場（個）	・思考ツールの活用	・発信方法や手段の検討
(イ)共創力		・体験的活動の実施	・外部人材の活用 ・他者との情報交換の場	・他者との 意見構築の場	・他者と協力させながら 学園内外への 発信の実践
(ウ)遂行力		・興味関心をもたせる 課題設定の工夫	・情報量や内容の 是非に関する問い返し	・計画や 思考内容の実践	・学園内外への発信の実践

・学びのログの活用（振り返りに対応）

3 研究実践

(1) 学園としての学びの連続性

① 5年生テーマ「連続性を意識した産業学習 ～飛島村の産業について知ろう・学ぼう～」

ア 前後の学年の「連続性」を意識した学習場面と生徒の変容について

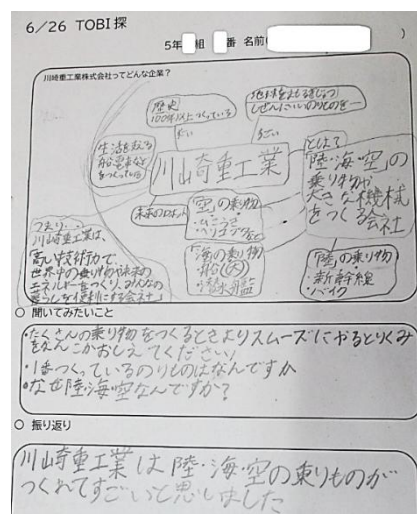
5年生初めての総合の学習で過去4年の TOBI 探についての振り返りを行った。1年生で学校探検、2年生で村探検、3年生で野菜収穫・販売体験、4年生で SDGs や環境学習について確認した。これまでの学習の積み重ねを生かしながら、5年生ではもう一度「飛島村」に着目し、「飛島村の産業について知ろう・学ぼう」をテーマとした。5年生での社会科の学習で工業について学ぶことを踏まえ、南側の工業地帯に着目し、6月上旬には実際に名古屋港のポートビル・海洋博物館へ出向いて校外学習を行い、7月上旬には飛島村に工場がある川崎重工業株式会社の方に学園で出前授業を行っていただいた。

イ 教師の意図と指導の工夫

ワークシートを工夫し、①自分で調べる②疑問に思ったことや、聞いてみたいことを記入する③質問事項をグループや全体で共有する④全体に報告するように4つの段階にまとめた。「飛島村といえば？」をテーマに、イメージマップを作成するなど主体性をもてるようにした。また、産業に関わる校外学習など、体験的な学びの機会を多く設けた。さらに、ペアになって生徒同士で考えたことを伝え合う活動や、皆の前で発表する活動を多く取り入れることにより、飛島村について調べた他の生徒の考えに共感したり、違いを共有したりすることができるようになった。

ウ 生徒の変容と成果

4つの段階を繰り返し行うことで、生徒は時間内により集中して取り組めるようになった。それらをまとめる際には、イメージマップ【資料1】で現時点での自分の理解度を整理することで、疑問点などに気付くことができた。校外学習では、名古屋港一帯に飛島港も入ることを学ぶとともに、鉱石などの原料の現物に触れ、コンテナの様子、港の広さ、工業地帯の大きさを感じ、名古屋港の役割の大切さを理解している姿が見受けられた。出前授業では、実際に事業者の方の話を聞くだけでなく、質問する時間を設けることで、生徒たちは現場の方の生の話



【資料1 5年生ワークシート】

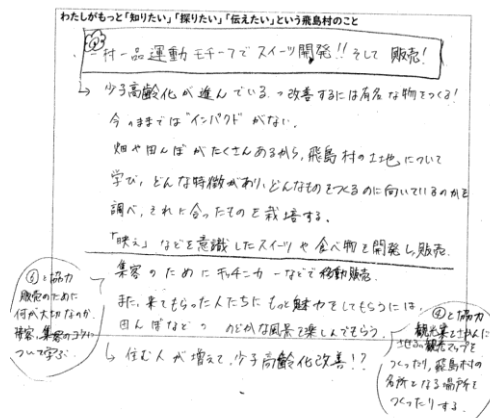
を聞くことができ、学習内容を深めることができた。生徒たちの知識へのよりよい刺激となった。

② 9年生テーマ「飛島村再発見～9年間の学びを紡ぎ、未来を切り拓く～」

ア 前後の学年の「連続性」を意識した学習場面と生徒の変容について

9年生では、3年（農業）、4年（環境）、5年（工業）、6年（防災）、7年（キャリア）、8年（国際理解）での学びを改めて振り返る活動を行った。これまでの知識の蓄積（過去）があったからこそ、生徒たちは「飛島村の臨海工業地帯にはなぜこんなに企業が多いのか」「飛島村の名産品は、どうしてほうれん草なのか」「飛島村にはなぜ鯉料理のお店が多いのか」といった、当時からさらに一步踏み込んだ、本質的な「新たな疑問」を自ら発見することができた。振り返る活動を行ったことで、過去の学びを「点」で終わらせず、最高学年の視点で「線」へとつなぎ、自ら新たな問い・課題【資料2】を設定する高い思考力が育まれていると考えられる。

上の分野について、興味をもって探りたい飛島村のヒミツや、これを伝えたいというようなことは何ですか。



【資料2 9年生ワークシート】

イ 教師の意図と指導の工夫

9年間の学びを「点」で終わらせず最高学年の視点で「線」へとつなぎ、現在から未来への連続性を意識させたいと考えた。そこで、これまでの知識（農業・工業など）を土台に「真の解決には誰にどこで話を聞くべきか」「学んだ工夫を未来の飛島村にどう生かすか」と意図的に問いかけるなど、フィールドワークの具体化と未来の創造を促す指導の工夫を講じた。

ウ 生徒の変容と成果

これまでの知識の蓄積（過去）を振り返ることで、当時の学びからさらに一步踏み込んだ「臨海工業地帯に企業が多い理由」や「名産品の歴史」といった本質的な新たな疑問（問い）を自ら発見・設定する姿へと変容した。過去の学びと現在の探究、そして未来の村づくりへの視座が繋がり、自発的に地域へ踏み出そうとする強い実践意欲と、主体的・協働的に課題を解決しようとする高い思考力を育む確かな成果へとつながった。

(2) 自分自身の学びの連続性

① 7年生テーマ「キャリア教育」

ア 「連続性」を意識した調べ学習や考えの構築

「イメージマップの作成」からスタートし、段階的に視野を広げる以下の3ステップで授業を展開した。『発見』の段階では、「働く」という言葉から想起するイメージをマップに表し、自身の現状の理解度や職業観を視覚的に捉え直させた。『発掘』の段階では、身近な大人へのインタビューレポート作成に加え、民間企業での研修経験をもつ教員による出前授業を実施し、働くことの実態や多様な視点に触れさせた。『発想』の段階では、飛島村にゆかりのある5つの職種の講師を招いた職業講話を実施し、多様な価値観を学ぶとともに、生徒自身が抱いた疑問を整理して「個人探究課題」を設定した。

イ 教師の意図と指導の工夫

生徒自身の素朴な考えを出発点とし、身近な大人、民間経験のある教員、地域の社会人へと対象を広げることで、学びが自然とつながる

「連続性」を意図した。指導の工夫として、民間企業（百貨店）での研修経験をもつ教員のリアルな実体験を伝える場【写真1】や、村にゆかりのある講師陣との対話の機会を設定した。これにより、抽象的であった「働くこと」を身近な地域社会の現実（生活実感）と意識することができた。そして、一人一人が切実さをもった「個人探究課題」を構築できるよう支援した。



【写真1 講師の話を聞く様子】

ウ 生徒の変容と成果

当初は「働くこと」に対し断片的・主観的なイメージしかもっていなかった生徒が、インタビューや講話を通して「働く意味」や「大切なこと」を多面的・多角的に捉えられる姿へと変容した。地域社会とのつながりを実感しながら学びを深めたことで、自らの問いを整理し、責任をもって追究する「個人探究課題」の決定へと至った。これが、2学期に予定されている「職場体験」への高い実践意欲と、豊かな職業観・勤労観の土台を築く確かな成果へとつながった。

(3) 時間軸での学びの連続性

① 2年生テーマ「村のすてきを見つけよう」

ア 学習内容における過去・現在・未来の実態や予測について

『発掘』の段階では、村探検に先立ち、事前学習として飛島村内にある施設や店舗の「発掘（リストアップ）」を実施した。各施設ができた時期や背景について、教師の意図的な発問を通して思考を深めさせた。

【生徒と教師の具体的なやり取り】

教師：村にはたくさんの施設やお店があることに気付いたね。この中で最近できたものってあるかな。

生徒：すこやかセンターは新しそうに見える。

教師：どうして新しく建物が建つと思う？

生徒：みんなが欲しいと思ったから？

教師：今ある建物はみんなが必要だと思ったからできたんだね。そして残っているんだね。

イ 教師の意図と指導の工夫

生徒が身近な施設を「古い・新しい」と平面的に捉えるのではなく、その背景にある「人々の願い（必要性）」に目を向けさせたいと考えた。そこで導入時、生徒が挙げた具体的な施設（すこやかセンターなど）を切り口に、「どうして新しく建物が建つと思う？」と意図的な発問を行った。新しい建物は「現代の住民のニーズ」であり、昔から残る建物は「当時の住民の願いが今も必要とされている証拠」であるという歴史的連続性を、生徒の生活実感に引き寄せて気付かせる指導の工夫を講じた。

ウ 生徒の変容と成果

当初は建物の新旧という「外見の違い」にのみ注目していた生徒が、教師の発問を機に「今ある建物はすべて、みんなが必要だと思ったからできたんだ」という内面の意味（価値）へと視点を変容させた。

「建物には人々の願いが込められている」という歴史的連続性に気付いたことで、生徒の中に「もっと村の建物のヒミツを調べたい」という思いが強くなった。これが単なる見学ではない目的意識をもった「村探検」へとなり、主体的に向かう強い実践意欲を引き出す確かな成果へとつながった。また、施設見学後、黄色（発見・感想）とピンク（疑問）の付箋で思考を可視化【写真2】し、施設別の模造紙にグルーピングして掲示させた。情報を1枚に集約し、考えを見やすくしたことで、11月の第2回村探検時に既習事項や当時の問いを即座に想起できる足場とした。これを起点に、新たな問いが生まれることを期待する。



【写真2 付箋で思考を可視化する様子】

4 成果

(1) 思考力

各学年において「自ら疑問や課題を見いだすこと」、そして「今の状況に応じた最適解や納得解を自分なりに考えること」という思考の深まりが見られた。単に知識を受け取るだけでなく、持続可能な未来や地域社会の創り手として、主体的に課題を解決していく高い思考力が着実に育っている。

(2) 共創力

社会の現場へと踏み出し、地域の人々と対話を重ねるプロセスを通して、「関わり、繋がり、共に作り出す」という共創力の深まりが見られた。さまざまな他者と関わりながら新しい価値を生み出す経験は、未来の地域社会の創り手として、周囲と連携しながら持続可能な社会を構築していく確かな力となっている。

(3) 遂行力

低・中学年において「気付く（地域への意識化）」「動く（日常での行動化）」「伝える（他者への主体的発信）」という、学習を实践へと結びつける遂行力の確かな高まりが見られた。自らの学びを次学年の活動や他者との関わりへと連続的に発展させていく、実践的な資質・能力が着実に定着していることが実証された。

5 課題

単元の中で前後のつながりを意識させた計画は、生徒たち個人の思考力や行動力を高める上では有効であった。しかし、その枠組みだけでは、多様な人と対話しながら新しいアイデアを共に作り出す「共創力」を十分にのばすことが難しいという面もあった。今後は、学習内容の縦のつながり（連続性）だけでなく、他の学年や地域の人々とリアルタイムに関わり合う「横のつながり（協働の場）」を意図的に授業へ組み込んでいく必要がある。また、生徒たちの意識が、前後の学年という狭い範囲のつながりだけにとどまり、9年間の探究活動全体のつながりを見通せていない姿が見られた。生徒たち自身が、前後の学年以外の TOBI 探の学びであっても、自分たちの今の探究と深く関係していることを客観的に捉える必要がある。今後は、全校的な探究のロードマップを示したり、異なる学年との交流を充実させたりして、自分たちの学びが全体の中でどこに位置しているのかを視覚的に理解できる手立てを講じたい。指導する教員が学びのつながりを成り立たせるためには、教員自身が他の学年の発達段階や実践内容を深く理解していることが不可欠である。しかし、自分が担当していない学年の指導経験がない場合、9年間の学びを一連の流れとして捉えることが難しい。義務教育学校の特性を生かして、他の学年の「TOBI 探」を互いに広く内容を把握し合える機会を学校全体でつくり、全学年を見通した指導体制を整えていく必要がある。